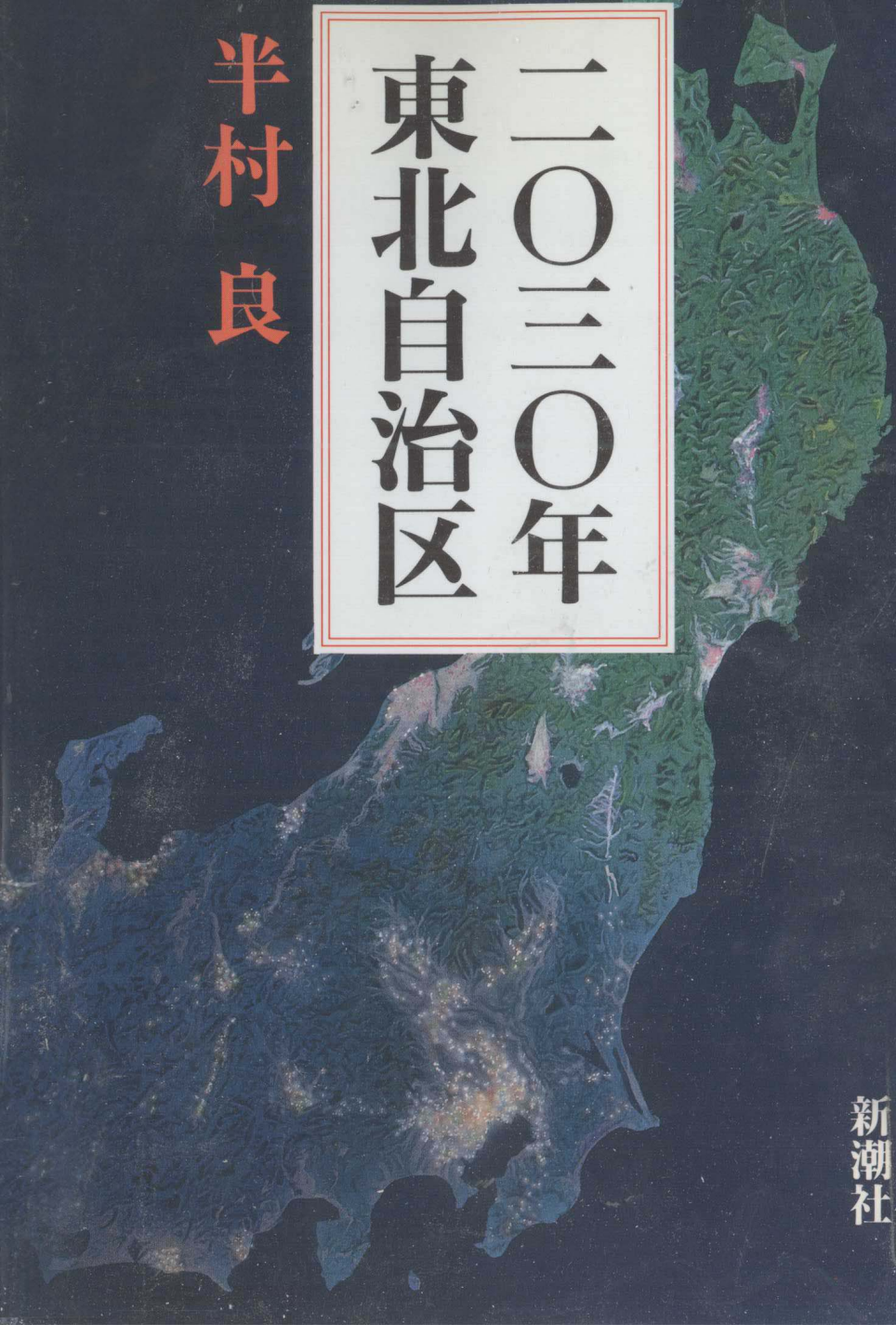
二〇三〇年 東北自治区

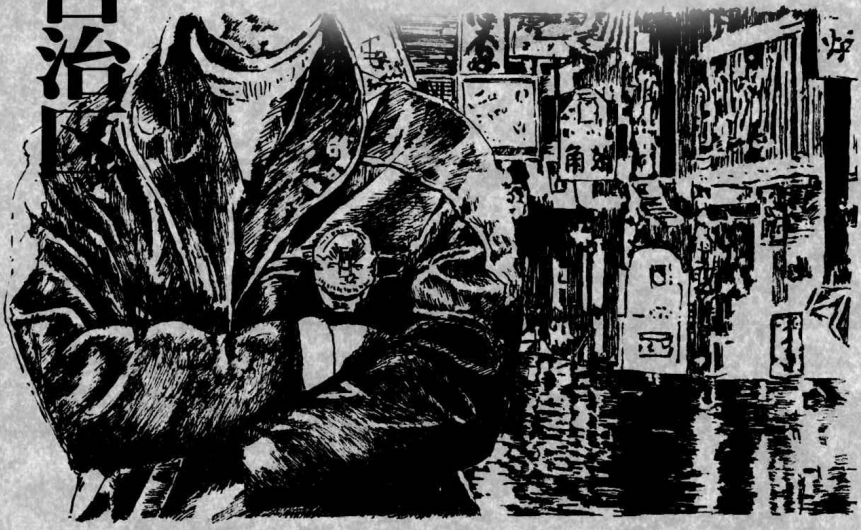
半村 良



新潮社

二〇三〇年 東北自治区

村 良



新潮社

二〇三〇年東北自治区

著者　半村　良（はんむらりょう）

一九九二年四月一五日　発行
一九九二年五月二五日　二刷

¥1,400—

発行者　佐藤亮一

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一番地
株式会社　新潮社

電話　営業〇三(3266)五一一一　編集〇三(3266)五四二一

印刷　大日本印刷株式会社　製本　加藤製本株式会社

振替　東京四—八〇八

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Ryo Hanmura 1992, Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-317505-2 C0093

二〇三〇年　東北自治区・目次

第1章　第六の男……7
第2章　スノーモービル……37
第3章　ヘリシップ……70
第4章　生科学研究所……103
第5章　エネルギー局……134
第6章　出入境管理局……163

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第7章　雑居都市……182
第8章　市街の塵……209
第9章　拳銃街……239
第10章　民族の砦……263
最終章　ヒューマニスト……291

装画　佐藤　正

二〇三〇年　東北自治区

第1章　第六の男

1

月岡耕司は拳銃を撃ちおえたところだった。射場は硝煙の臭いに溢れているが、月岡に限らず、そこにいるときは誰もその臭いを意識してはいないようだ。

だが、月岡は射撃訓練のあと、必ず服を着替える。時間があればシャワーを浴びて、臭いを消すように心がけていた。そのまま人に会えば、臭いでデカだと思われる。

その射場はそう大きくはない。警備本部の地下四階にある十レーンのステージなのだ。

彼はこげ茶色のサーコートのポケットへ残った弾(たま)を入れ、左手に銃をぶらさげてブースから出た。

正式には行政官用20年型。通称オフィス20。口径9ミリ。全長204ミリ。銃身長116ミリ。重量920グラム。装弾数18。ライフリング6条右回り。初速400メートル。東北工業製。ほとんどの部分がプラスチックで、一部軽合金が使ってある。

彼は右手で耳栓を片方だけ外した。最近使われている銃で、でかい音をたてるのは、このオフィス20ぐらいなものだ。消音機構一体化の銃が当たり前になっているのに、行政官用のにはそれがない。示威のためと、公務執行中であることを知らせるためだ。音でどっちが悪者か判るようになっている。

もっともはじめから音のする銃を用意すれば別だが、撃ち合いを予定に入れて泥棒に行く奴はそう多くない。

月岡は左のポケットに銃を入れて射場を出た。ついでに左の耳栓もとり、青いサーコートを着たガードマンたちがいるフロアー・ステーションの前を通って一般通路をエレベーター・ホールのほうへ進んで行く。銃の重みでサーコートの左肩が下がり気味だ。

この警備本部は三十年以上も前に建てられたビルだ。もとは県の施設だったという。地下四階、地上七階。射場は自家発電用の何かが置いてあったところらしい。そんなによく停電したのだろうか。今では停電なんて考えられない。もっともエネルギー事情が最悪の時代をくぐり抜けて来たのだから、その時代の遺物があっても不思議ではないが。

彼はエレベーターで四階へあがる。四階の隅に小さな個室をあてがわれているのだ。

ベッドにバス、トイレ。椅子とソファーと小さなテーブル。クロゼット。それに小型冷蔵庫。エアクリーナー。キッチンというほどのものではないが、簡単なクッキングならなんとか出来るユニット・キッチン。……みんな役所の備品だ。そこも昔の医務室のあとだそうだ。

パソコンのNE30Sだけは私物だ。一応総務部に私物登録をしてある。

彼が部屋へ入ると、そのNE30Sのランプが点滅していた。

彼はサーコートのポケットから銃を出してユニット・キッチンのハッチの上に置き、それから

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

コートを脱いだ。
シャツの胸ポケットからＩＤカードを出して、パソコンのスリットに差し込む。彼のパソコンは静かに目覚めた。
メッセージがあります。
いつもオーディオを切ってあるから、文字だけが画面に出ている。キーボードは埃で白っぽくなっていた。この一ヶ月、警備の訓練が続いたからだ。
彼はＮＥ３０Ｓの前へ椅子を持って行き、腰をおろして音声のスイッチをオンにしてから、メッセージを出した。
連絡せよ。田所。
彼は舌打ちした。秘書室長の田所賢治だ。半年も警備へ放り込んでおきやがって……。
だが彼は嬉しかった。やっと秘書室へ戻れるような気配を感じたからだ。
しかし、その短いぶっきら棒なメッセージでは情報が足りなさすぎる。月岡はファウンデーション・センターの情報管制室にいる遠藤太郎にアクセスした。
遠藤は月岡のクラスメートだ。久しく会ってはいないが、今も親友のはずだった。卒業した直後は、月岡が首長の秘書になったことで腹を立てたこともあったが、それも半年ほどで機嫌よく付き合ってくれるようになっていた。
だがその遠藤は月岡のアクセスに対して、即座に門前払いを食わせた。
００００。四つ並んだゼロを睨んで、月岡は唇を歪めた。遠藤はもう情報管制室にいないのだろうか……。
だがそのあと少し間をおいて１が出た。作業中侵入禁止。遠藤はまだいるのだ。

月岡は立ち上がり、服を脱いでバスルームへ行った。シャワーで射場の臭いを洗い流す。遠藤はあとで連絡して寄越すつもりだろう。

バスルームから出ると、クロゼットのドアを開けてスーツを着た。シャツは紺、スカーフはベージュ。ホルスターをつけてオフィス20を差し込む。スーツは黒だ。

クロゼットのドアの裏についた姿見を見ながらあとずさる。もっと暗い色のスカーフを買おうと思った。

それからクロゼットのドアをしめ、パソコンのサブスイッチをオフにしてから、眼鏡を取りあげ、右の縁についている小さなスイッチをスライドさせた。彼は視力がいいほうだ。その眼鏡はここへ来てからかけるようになった。警備関係者はそれを単にラジオと呼ぶ。腕時計はマイクだ。ポケットにさしたペンをマイクにしている者も多い。

彼は部屋を出て同じ階にある東京センターへ向った。資料室の一部だが、東京関係のデータはこの自治区の性格から膨大なものにならざるを得ない。だから独立して東京センターがあるのだ。

2

東京センターでは、今日も実習をやっていた。警備局へ入ったら、誰でも一度は東京実習をやらねばならない。今日の連中は特に新人ばかりで、タオル地のシャツブレザーを着てうろうろしていた。半袖だから寒そうだ。時計を見ると教官が来る時間にはまだ少し間があって、スニーカーの紐をだらしなく引きずっている奴もいた。

灰皿が置いてあるのは、警備本部の中でもここだけだ。もう喫煙の習慣はほとんど全世界で絶えかかっている。しかしJTはまだ健在で、東京にはタバコ屋がどこにでもあるそうだ。ファウンデーションでは、もちろんとうにタバコ屋はなくなっているが。

スタンド式の灰皿を壁際に持って行って、壁に寄りかかりながら火のついたメロウをくわえている男がいる。煙を吐き出して月岡のほうを見た。

なぜメロウだと銘柄が判ったかと言えば、警備本部に用意してあるタバコはメロウだけだからだ。JTは十種類以上の銘柄のタバコを発売していて、それを全部覚えるのも実習の一部としてプログラムされている。

「中毒になりますよ」

月岡はタバコをくわえている坂井の前で足を止めて言った。

坂井は中堅の警備局員だ。たびたび特命で東京へ潜入している。

「タバコはすぐ癖になる。だが毒と言うほどじゃない。昔の連中はみんな喫っていたんだ。喫わなくなったからと言って、肺癌が減ったかよ」

それは喫煙者がみな言う科白だ。たしかにファウンデーションでも、肺癌は漸増傾向にある。だがタバコを喫わないために死んだ者はゼロだ。タバコと肺癌の因果関係はたしかに存在するのだから、喫わないにこしたことはない。

「そんなにうまいですか」

月岡は喫煙の習慣を常々不思議に思っていたので、そう尋ねた。

「昔のタバコは滅んだが、マリワナだけはこうして生き残った。それだけのことはあるさ。やってみろよ」

坂井は喫いさしのタバコを指にはさんで差し出した。
「いや。俺はやりません」
「マリワナが麻薬扱いだったなんて、信じられないな」
坂井はそう言ってまたタバコをくわえた。
「近いうち、また東京へやられそうだ」
月岡は立ち去りかけた足を止めた。
「多いですね、このごろ」
坂井は首をすくめてみせる。
「向うの役人は過激派に対してこっちほど厳しくない。このところだんだん甘くなっている。まるで庇(かば)っているようだ。やりにくくなった」
「ご苦労ですね」
月岡は本気でそう言った。坂井の仕事は、東京で反体制分子の違法行為の証拠を洗いだし、警視庁へ引き渡すことなのだ。だが、ファウンデーションと警視庁の利害は必ずしも一致しない。ことに東京の犯罪者がファウンデーションに逃げこむことは稀だから、東京側がファウンデーションに協力するメリットはほとんどないに等しい。そのため坂井たちは余分な苦労をしているのだ。
「秋田大の葉山教授が、さかんに東京との摩擦拡大を警告していますが、あっちの雰囲気はどうなんです」
すると坂井は冷笑するようにニヤッと笑った。
「そんなことはきみらのほうが詳しいんじゃないのか。向うでファウンデーションと言えば、はじめからエゴの塊という意味だものな。俺だってときどきそう思うことがあるよ。きのう東京か

ら帰ったばかりだ、などと言ったら、スリーナインへ通報されかねない」
999番は防疫署だ。月岡は同情をこめて頷いた。彼自身、坂井が握手を求めたら、多少手を出すのをためらう気分がある。白石ターミナルの検疫システムを信じてはいてもだ。
「きみらはいいよな。俺も政治か経済のほうへ行けばよかった。警備はダーティーワークだ。ことに俺なんかは損な役回りさ。早く出世して俺を引っ張りあげてくれないか。忠実な家来になると思うぜ」
坂井はそう言って笑った。ひがみなどはまったくない、さっぱりした笑い方だった。彼はいい男だった。常に現実から目をそらさず、職務に忠実だった。愚直というのではない。見るべきところはちゃんと見ているのだが、余分な夢を持たないようにしているらしい。動きが的確で正しい結論に向って突き進む。だから仲間の信望を集めているが、むずかしい東京での任務を与えられもする。彼がこの先も昇進し続けるのは間違いないが、いま警備局で最も危険な任務についているのもたしかなのだ。出世はそこを無事切り抜けてからというわけだ。
「時間だ」
壁にもたれていた坂井が突然時計を見て体を起こした。
「今日はあいつらの教官でね」
坂井は照れ臭そうに言った。
「なんだ、そうだったんですか」
月岡は新人たちのほうへ去る坂井を見送ってから、東京センターの室長のオフィスへ向った。
田所賢治との連絡は、すべて室長の飯島を通すようきめられていた。月岡が警備本部にいるのは、田所が送り込んだからで、警備本部における身元引受人は飯島なのだ。

首長の秘書の一人が警備本部へ出向するには、いろいろとむずかしい問題がある。ファウンデーションは権力の集中にはことのほか神経質なのだ。警備局は昔の自衛隊と警察を併せたようなものだから、首長に限らず、もし誰かがその力を恣意的に利用すれば、このちっぽけな自治区は、たちどころに専制君主を生み出すことになってしまうだろう。

3

オフィスへ入ってドアをしめると、飯島が冷たい表情で顎をしゃくり、自分のデスクの前の椅子を示した。

「きみは寒河江の情報管制室にアクセスしたらしいな」

月岡は背筋がゾクッとした。自分がそんなに厳重に監視されていたとは思ってもみなかったからだ。

「はい」

逆らうな、という警報が彼の頭の中に閃していた。

「遠藤太郎。そうだな」

「はい」

「まずいよ」

飯島は月岡の顔をみつめた。普段かけない眼鏡をしているのだ。ラジオをつけていることはもう判っているはずだ。

「その管制官とよく交信しているのか。だとしたら溯って記録を調べなければならん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com